

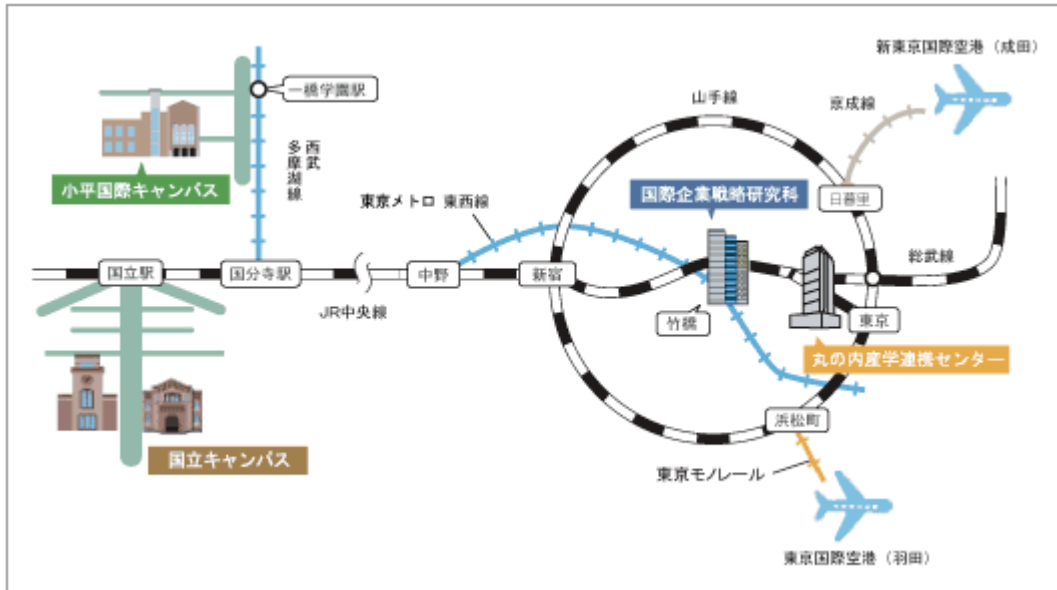
日本 18 世紀学会第 35 回全国大会  
プログラム  
報告要項

2013 年 6 月 22 日（土）、23 日（日）

一橋大学  
〒186-8601 国立市中 2-1

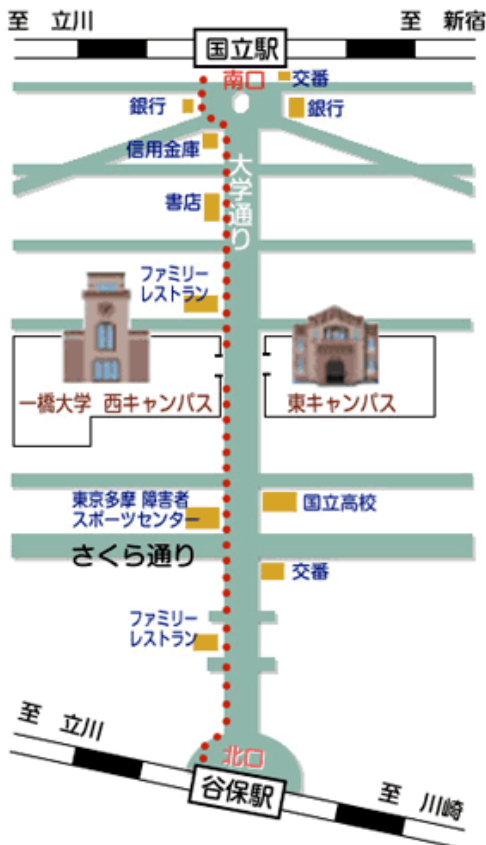
# 第 35 回大会プログラム

## <一橋大学へのアクセス>



\*会場は国立キャンパスです。

## <キャンパス周辺概略図>



- 〒186-8601 東京都国立市中2-1
  - 商学研究科・商学部
  - 経済学研究科・経済学部
  - 法学研究科・法学部
  - 法科大学院
  - 社会学研究科・社会学部
  - 言語社会研究科
  - 国際・公共政策研究部・教育部 (アジア公共政策プログラム以外)
  - 経済研究所 (〒186-8603)
- JR中央線 国立駅 下車
  - 南口 徒歩約6分
- JR南武線 谷保駅 下車
  - 北口 徒歩約20分
  - 国立駅行 一橋大学下車 バス約6分

<キャンパス内建物配置図>



- \* 発表会場：東1号館 3 4
- レクチャー・コンサート会場：佐野書院 2 3
- 懇親会会場：職員集会所 6

## 第 1 日 6 月 22 日 (土)

発表会場 一橋大学 国立東キャンパス 東 1 号館 2 階 1202 号室

### 9:30 受け付け開始

### 10:00-10:10 開会挨拶

#### 自由論題報告

### 10:10-11:00 自由論題報告 (1)

「J. J. ルソーにおける「自然界の教育」の諸相と構造について」

荒井 宏祐 (東京大学大学院)

司会: 田中 マリア (筑波大学)

### 11:00-11:50 自由論題報告 (2)

「ジャン=ジャック・ルソー『対話』のロンドン草稿 —ブルック・ブースビーによる「第一対話」の編集について—」

土橋 友梨子 (学習院大学博士後期課程)

司会: 佐藤 淳二 (北海道大学)

### 11:50-13:30 昼食 (+幹事会)

昼食会場: 東 1 号館 2 階 1202 号室 及び 会員控え室 (1203 号室)

### 13:40-14:30 自由論題報告 (3)

「18 世紀を再記述する - リチャード・ローティとポスト哲学のプログラム -」

若澤 佑典 (東京大学大学院/ニューヨーク大学大学院)

司会: 久野 陽一 (愛知教育大学)

### 14:30-15:20 自由論題報告 (4)

「カーライルは 18 世紀をどう見たか— 知識人の自己開示として読む文明批評」

橋本 登代子 (同志社大学神学研究科博士後期課程)

司会: 大石 和欣 (東京大学)

### 15:20-15:30 休憩

### 15:30-16:20 自由論題報告 (5)

「カステル神父の「視覚用クラヴサン」 —リヨン・アカデミー所蔵 1741 年の未発表書簡を中心に—」

寺尾 佳子 (日本学術振興会特別研究員)

司会: 馬場 朗 (群馬県立女子大学)

### 16:40-18:10 レクチャー・コンサート:

「17~18世紀のチェンバロ音楽」

会場: 一橋大学 国立西キャンパス 佐野書院

演奏: 渡邊順生氏

1950年、鎌倉生まれ。一橋大学社会学部卒業。

アムステルダム音楽院にてグスタフ・レオンハルトに師事、最高榮譽付ソリスト・ディプロマを得て同学院を卒業、プリ・デクセランスを受賞。

その後、ブリュッヘン、ビルスマ、エルウィスなどの名演奏家と多数共演、多数のCDをリリース。

『モーツァルト: フォルテピアノ・デュオ』(ALM レコード) により 2006年レコード・アカデミー賞 (器楽部門) を受賞。

著書『チェンバロ・フォルテピアノ』東京書籍、2009、868 p.

2010年度サントリー音楽賞受賞。

上野学園大学客員教授、国立音楽大学、桐朋学園大学、東京音楽大学講師。

曲目:

- ・ルイ・クーラン Louis Couperin (c1626-1661)  
フローベルガー氏の模倣によるプレリュード  
他
- ・ラモーン Jean-Philippe Rameau (1683-1764)  
恋の嘆き Les tendres plaintes  
つむじ風 Les Tourbillons  
キュクロプス (一つ目巨人たち) Les Cyclopes  
他
- ・J. S. バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)  
イタリア協奏曲 Italienisches Konzert  
半音階的幻想曲とフーガ Chromatische Fantasie und Fuge

### 18:30-20:30 懇親会

会場: 一橋大学 国立西キャンパス 職員集会所

会費: 6,000 円

## 第2日 6月23日(日)

発表会場 一橋大学 国立東キャンパス 東1号館 2階 1202号室

### 9:30 受け付け開始

自由論題報告

### 10:00-10:50 自由論題報告(6)

「「実用性」をめぐって——夏目漱石と十八世紀」

落合 一樹(東京大学大学院)

司会: 服部 典之(大阪大学)

### 共通論題 「18世紀の〈地下世界〉を掘る」

コーディネーター兼総合司会 寺田 元一(名古屋市立大学)

### 11:00-11:20 趣旨説明

「18世紀の〈地下世界〉を掘る」

寺田 元一(名古屋市立大学)

### 11:20-11:55 第1報告

「ジョン・トーランドのスピノザ反駁」

三井 吉俊(千葉大学)

### 11:55-13:00 昼食および総会

昼食・総会会場: 東1号館 2階 1202号室

### 13:10-13:45 第2報告

「18世紀イギリス・エロティカの系譜」

小林 章夫(上智大学)

### 13:45-14:20 第3報告

「「半地下」のウィーン 18世紀後半のハプスブルク君主国における書物の流通」

上村 敏郎(獨協大学)

### 14:20-14:55 第4報告

「日本における「古典」の成立とその展開—『太平記』を事例として—」

若尾 政希(一橋大学)

15:00-15:20 コーヒー・ブレイク（質問書回収）

15:20-16:10 討論

16:10-16:15 閉会挨拶



\*大会参加費として **500 円**（ただし学生は**無料**）、非会員の方は **1,000 円**をいただいております。ご了承ください。

\***お弁当**をご希望の方はお申し込みください。

両日とも、大学周辺に飲食店がありますが、お弁当をご用意いたします。日曜日は、お昼休みに総会がありますので、出席を予定されている方はお弁当をお申し込みください。

お弁当代：1,000 円（税込、お茶付）

\*大会参加の際、保育所、ベビーシッターを利用される場合は、学会にて保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。ご利用を希望される方は、出欠はがきにその旨を記入下さい。大会校事務担当者が個別に打ち合わせをいたします。

\*大会への出欠は同封の葉書で **5月24日（金）**までにお知らせください。

## 自由論題報告

会場 一橋大学 国立東キャンパス 東1号館 2階 1202号室

### J.J.ルソーにおける「自然界の教育」の諸相と構造について

荒井 宏祐  
(東京大学大学院)

本発表では、ルソー教育思想における「自然界の教育」思想・実践の諸相・構造の一端に触れた

い。『エミール』や『新エロイズ』などの作品には、まず1：自然界にある事物・現象やその作用・機能・構造などの「自然界についての教育」が見られる。また2：自然界の背後・上位にあるものを考える、「自然界を通じての教育」がある。さらに3：自然界を、教育空間・装置や、現物・現場・体験学習の場所として利用する「自然界の中の教育」があげられる。最後に4：自然界と人間・社会との関係や自然保護など、「自然界のための教育」があることが指摘できる。

この発表では、これらを総称して「自然界の教育」と呼ぶが、ルソーはこれら「外なる自然」の教育を通じて、既にいくつかの先行研究が指摘するように、人間の「内なる自然」にも影響を及ぼそうとしている。

さらに構造面に関しては、例えば1による知識を元に、2や3などを教えるという進め方が示されていることから、四つの教育間に方向性があること、またルソーの叙述から、「自然界の教育」を生氣あるものとする四要因が、即ち「自然界への親愛」、「生物愛」、「自然の善性の重視」、「人間中心主義的自然観の否定」が指摘できる。次に、思想と実践、及び教育対象（自己・他者）を2軸とする分析で、教育対象面の領域整理に、また教育主体（エミールの家庭教師とそれ以外）と客体（本物のエミールとそれ以外）を2軸とする吟味により、教育内容面の領域整理に接近することで、教育構造面の一端に触れることができる。

一方、ルソーには「植物学についての手紙」という、植物学に関する教育実践記録がある。ここでも上記の諸相のいくつかが見られるほか、『エミール』で説かれた消極教育や現物・現場・体験学習などが実践されている。ここでルソーは、若き頃の「失敗した」家庭教師像とは異なる、熟練した家庭教師像を見せているとも思われ、「自然界の教育」において、ルソーが単なる教育思想家にとどまらず、実践家としての一面を持つことが示されている。

なお、本発表の今後の課題として、ルソーの「事物の教育」力の根拠とデイドロの考え方との比較や、「自然界の教育」と現代の「持続可能な発展のための教育」(ESD)との関連などにも触れた

い。



## ジャン＝ジャック・ルソー『対話』のロンドン草稿 —ブルック・ブースビーによる「第一対話」の編集について—

土橋 友梨子  
(学習院大学博士後期課程)

1780年、イギリスのリッチフィールドにて『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く、対話』の「第一対話」が出版された。この作品の出版は瞬く間に「ルソーの狂気」をヨーロッパ中に知らせたのだ。この「第一対話」の手稿を託され、出版を執り行ったのはある一人のイギリス人、ブルック・ブースビーであった。

『エミール』と『社会契約論』の断罪後、ルソーはディヴィッド・ヒュームの尽力によってイギリスに渡り、ウットン・ホールに落ち着く。ブースビーとルソーの出会いは、ルソーのウットン滞在中のことであり、親子ほどの年齢が離れていた彼らを結び付けたのは植物への愛着であった。両者が離れて暮らすようになってからも手紙の交換は続き、1776年4月6日、ルソーはパリを訪れたブースビーに『対話』の「第一対話」のみを託し、自分の死後に出版するよう頼んだのであった。この手稿が現在ロンドン草稿と呼ばれているものである。

ロンドン草稿は第三部までである対話のうちの「第一対話」しかないために、初版『ルソー全集』(1782年)内にて、「第三対話」全てを含む『対話』が出版されて以来、この版が注目されることはなかった。また編集に関しても、ブースビーと『全集』の编者達の間には、作家に対する配慮の差があるように見做されている。なぜなら前者がルソーの草稿にほぼ手を加えずに出版したのに対し、後者は作家の評判・名誉の失墜を避けるために、草稿からいくつもの文章や注、固有名詞を削除した後に出版したからである。

しかし一見ルソーへの配慮に欠けて見えるブースビーの編集こそ、作家の意図を最も理解し、尊重した編集方法であるように思える。なぜなら、ルソーは自分の作品が誰からも手を加えられることなくありのままに本となり、そのような本を読者が直接手にすることを切望していたからだ。このことは、とりわけ『エミール』断罪後に書かれた論争作品の中で繰り返し要請されている。

そこで本発表では、ブースビーによる『対話』の編集の意味を検討してみたい。これを目的とし、論争作品内でのルソーの言葉を確認しながら、ブースビーの書簡や「出版者の序文」に着目することで、彼が単にルソーの熱烈な賛美者であったのではなく、ルソー作品の理想的な読者であったことが提示できるだろう。しかし同時に、この編集作業が引き起こしてしまった『対話』という作品の作品解釈への影響も明らかにしたい。

## 18 世紀を再記述する - リチャード・ローティとポスト哲学のプログラム -

若澤 佑典

(東京大学大学院／ニューヨーク大学大学院)

リチャード・ローティ (Richard Rorty, 1931-2007) は、20 世紀を代表するアメリカの哲学者として知られている。ローティは『哲学と自然の鏡』(*Philosophy and the Mirror of Nature*, 1979) において、近代哲学を支配してきた鏡のイメージを指摘し、これに徹底的な批判を加えた。近代哲学は外在的真理の存在を前提とし、これを鏡のように正確に再現することで、われわれの知識を基礎付けようとしてきた。しかし、そのようにして発見される普遍的真理や、歴史を超えて妥当性を持ちうる原理など存在しない。基礎付けに対する欲求を断念し、「心」に関わる哲学的語彙を捨て去り、認識論と形而上学から離脱すること。こうした試みを通じて、ローティは「哲学」という営為そのものの変容を試みた。

このような探求の過程で、ローティが着目したのが「共感」である。『偶然性・アイロニー・連帯』(*Contingency, Irony, and Solidarity*, 1989) では、共感を媒介とした連帯の可能性が模索される。こうした「共感」に依拠するポスト哲学の実践は、18 世紀のスコットランド啓蒙、特にデイヴィッド・ヒュームの『人間本性論』を想起させる。本発表では、『偶然性・アイロニー・連帯』におけるローティの構想を、ヒュームの『人間本性論』との関わりにおいて検討する。従来の研究において、両者の関係性は「プラグマティズム」、「啓蒙」という二つの語彙から論じられてきた。第一の視点においては、ヒュームをプロト＝プラグマティストと理解することで、ローティのプラグマティズムをヒュームと接続することが試みられた。第二の視点では、ローティの反基礎づけ主義が「第二の啓蒙」として語られていることに注目し、「第一の啓蒙」が実行された 18 世紀哲学との連続性が考察される。

本発表では、ローティの「再記述」という概念を出発点に、ヒュームの「共感」及び「懐疑論」に焦点を当てる。ローティは、先行者の語彙を置き換え、新たな言葉や主題を創造していく過程を「再記述」と表現し、ポスト哲学における実践の指針としていた。ここでは『偶然性・アイロニー・連帯』という書物自体が、ヒューム哲学の「再記述」であることを示したい。ローティは、「人間本性」という基礎づけ主義的な語彙を排除しつつ、「共感」や「懐疑論」をめぐるヒュームの考察を、リベラル・ユートピアをめぐる問題として再構成しているのである。

## カーライルは 18 世紀をどう見たか— 知識人の自己開示として読む文明批評

橋本 登代子

(同志社大学神学研究科博士後期課程)

Thomas Carlyle は読者や評論家の評価が分かれる著者である。Samuel Smiles は *Life and Labour* の中で彼を “The modern Socrates” と敬意を表しているが、C.S.Lewis は『詩編を考える』の中で「彼は民主主義を否定した」と記している。スコットランドを出自とするカーライルはロマン主義の文学者であると認められているのであるが、イギリスロマン主義者としての彼の特質は、個としての主観の重視にある。本発表では『英雄崇拜論』をテキストとしてカーライルは 18 世紀をどう見たか、という視点を通して彼の宗教的心性を探り、その考察の結果を報告する。彼は「真の文人は、神聖である」と述べ、教会の権威から距離を置き彼個人の感性で 18 世紀に文学活動をした人物たちを評価している。

『英雄崇拜論』においては Dr. Johnson, J.J.Rousseau, Robert Burns が第五講で取り上げられ英雄として評価されているのであるが、まずカーライルがなぜ上記の文学者、思想家を「文人の英雄」として選んだかを考察の始点とする。次に彼の見識が 19 世紀の未来、すなわち現代の文化的価値観に照らして、適切なものであったかどうかを検討する。

カーライルがジョンソン博士の信仰生活を高く評価している事実に注目しておくべきである。ルソーについては、カーライルや John Ruskin への影響が認められる。それは世界のどの地域の宗教も疎かにしない姿勢である。Voltaire には敬意を表していないカーライルであるが、彼がルソーを 18 世紀の文学的英雄の一人として名をあげているという事実から判断すると、カーライルは啓蒙の思想家たちを合理主義者たちの一群としてではなく個々に理解しようとしている、という事実が確認できる。バーンズの主体的情感重視の創作態度については聖職者たちからの批判は厳しいものであったが、スコットランドの風土への愛も含めてカーライルの深い共鳴を得ている。バーンズを評価するカーライルの視点は民衆が育てる文化の価値を歴史の継続性において認める姿勢である。この場合キリスト教の倫理観とは異なる価値を認める勇気が必要であった。以上の考察の結果からカーライルが啓蒙主義的価値を全く認めていない、とは断定できないと考える。

1930 年代以後イギリスの知識人たちは経済の恐慌、大量の失業などの要因により共産主義陣営に属した人々も少なくなかったが、19 世紀の知識人たちは William Morris など一部の知識人たちを除いて、自立した書き手であった。ドイツロマン主義文学を紹介し、『フランス革命論』の著者であるカーライルは「第四階級」と見なされる読者に積極的に自己開示をした知識人であった。Self-made Man としての彼の著作を読みむと、保守主義のチャンピオンとしての執筆が国益に貢献した事実も指摘できる。「労働は祈りである」と彼は言った。予定説による救済を説かず、労働を通して「知る」ことの意義を説教者のように説いたのである。

## カステル神父の「視覚用クラヴサン」 —リヨン・アカデミー所蔵 1741 年の未発表書簡を中心に—

寺尾 佳子  
(日本学術振興会特別研究員)

18 世紀中葉のフランスでは多種多様な光学装置が発明され、それらは当時の哲学者や文学者、大衆の想像力を大いに刺激した。ルイ＝ベルトラン・カステル神父 (1688 年-1757 年) の「視覚用クラヴサン」 *clavecin oculaire* もその一例である。一般にクラヴサンは耳を楽しませるが、カステルは音楽を目で鑑賞するのだという。神父のこの構想は、当時の文学テキストや雑誌等による言及のおかげで今日かろうじて文学・文化史に名を残しているが、その形態や仕組みについては謎に包まれている部分が多い。しかしながら文学・思想における受容のみならず、音楽や絵画等様々な領域と繋がりをもつ同装置の特性を考慮すれば、「視覚用クラヴサン」の研究は、それを通して 18 世紀の諸芸術を改めて見つめる視点を提供することになり意義深い。発表では、1741 年に神父がリヨン科学・文芸・芸術アカデミーに書送った未発表書簡を手がかりに、「視覚用クラヴサン」の構想がこの時期、同アカデミーとの交流の中でいかに具体化しつつあったのかを明らかにしたい。

「視覚用クラヴサン」に言及した最も重要な文学テキストのひとつが、ディドロによる哲学的対話篇『ダランベールの夢』(1769 年) である。「万物は絶えず流転している。……あらゆる動物は多かれ少なかれ人間であり、あらゆる鉱物は多かれ少なかれ植物であり、あらゆる植物は多かれ少なかれ動物である。自然には何ひとつ分明なものはない。……カステル神父のリボンだ……そうです、カステル神父さん、あなたのリボンですよ。」本発表で取り上げるのは、リボンが中枢をなすこの装置の実現に向けた具体案を認めた書簡である。カステルは当時、複数のリヨン・アカデミー会員と学術的、友好的な交流関係を維持しており、1741 年、同アカデミー文芸部門の書記ジャン＝ピエール・クリスタンに二通の手紙を送っている。その中で、リヨンの染色技術の協力のもとでリボンを実現させたいという思惑を詳細に述べている。そのリボンとは、感知しがたいほど微細なグラデーションの効果により、色彩の微妙な差異をあまねく表現したものである。

技術的発明を含む様々な文化現象は創造的な空想の領域に影響を及ぼすが、こうした関係性に注目しながら芸術作品と向き合う研究は、現代の映像文化の展望や危機について考察するための手がかりを示すだけに、今日いっそう重要性が増している。

## 「実用性」をめぐる——夏目漱石と十八世紀

落合 一樹  
(東京大学大学院)

18世紀英文学研究者としての夏目漱石は、『文学評論』のなかで、ダニエル・デフォーを手厳しく批判しているが、そこでは、デフォーのリアリズムと正岡子規らの「写生文」とが正反対のものとして提示されている。両者はディテールを細かく描写するという点においては等しいが、「写生文」が「無頓着に」細部を並列させるのに対して、デフォーは「万事实用から割出して、損得を標準にしている」と言う。この、実用性という原則によって構成されている「リアリズム」と、それには無頓着な「写生文」との対立は、漱石にとって、近代文明とそれに抵抗するもの、という非常に大きなテーマであった。

本発表では、「実用性」をめぐるリアリズムと写生文との対立を、明治日本において夏目漱石が直面した問題であると同時に、18世紀のヨーロッパ人たちが近代化の過程で直面した問題でもあると考え、「実用性」(=有用性、有意味性)という漱石が見出した観点から18世紀の文学を考察する。具体的には、漱石の文学論を現代の用語で捉え直し、それを基にして、彼が『文学評論』で直接的に論じたデフォーやスウィフトのみならず、ヘンリー・フィールディングやスターンの小説作品における「実用性」の問題を検討する。また、(漱石とは直接的な関係はない) デイドロの絵画論を手懸りとして、ホガースや後のラファエル前派を好んだ漱石の美術作品への趣味について考察することで、彼の「リアリズム」への態度を明らかにする。そして、漱石自身の小説作品、とくにこうした文脈のなかでは何かと論じられることの多い『吾輩は猫である』だけではなく、中期・後期の作品も分析することで、単なる写生文を書くことに満足はせず、近代的でリアリスティックなノベルを書こうと試みた彼の両義性を見出し、その視点から18世紀文学、とくにスターンの『トリストラム・シャンディ』の近代への両義的な態度を考察する。

## 共通論題 「18世紀の〈地下世界〉を掘る」

会場 一橋大学 国立東キャンパス 東1号館 2階 1202号室

### 18世紀の〈地下世界〉を掘る (趣旨説明)

寺田 元一  
(名古屋市立大学)

総合的企図：19世紀以降のアカデミズムの発展によって覆い隠され、地下へと押し込められた18世紀の〈知〉や〈情〉の世界、あるいは元々18世紀において地下に押し込められていた〈知〉や〈情〉の世界を、考古学的に(?)発掘する。国ごと地域ごとに地下と地上を分かち線は、18世紀においても異なり、19世紀以降のアカデミズムの発展が新たに引き直した線も異なる。そうした差異を意識しながら、〈地下世界〉を発掘し明るみに出すことで、われわれの知る地上の〈知〉や〈情〉の世界を相対化し、複雑に文脈化された、より多元的な18世紀像に迫る。

18世紀フランスの地下文書については20世紀初頭から発掘が続けられ、現在では多数の写本がヨーロッパ各地で発見され、それが新たに校訂されてUniversitasなどから多数出版されている。日本でも赤木昭三氏の研究書が出され、また野沢協氏編訳の『啓蒙の地下文書』二巻などが出版されて、地下文書について多くの知見が得られている。

しかしながら、こうした地下文書発掘は、基本的には盛期「啓蒙」思想家の先駆者探しといった方向でなされ、地上の「啓蒙」思想を既定の事実にしてテキストの価値を測り、価値が高いとされるものが校訂され、それに著者名が付されて、それが新たに古典化(精製!)されている。それはそれで、確かに私たちの研究の視野を広げ、18世紀フランス思想をより広く深く研究することを助けたが、一方で〈地下世界〉そのものは十分明らかになっていない。この共通論題では、地下文書を初めとする〈地下世界〉のあり方そのものを、「啓蒙」の多元性に留意しつつできるだけ複合的に問いたい。以下は問題群の例。

従来のアカデミズムによって〈地上〉と〈地下〉という差別化がいかになされ、18世紀の知的生産物に〈古典〉と〈そうでないもの〉という区別がいかになされたか。

英墮仏日などの国々の時代的地域的な文脈で、〈地上〉と〈地下〉という分節化がいかになされているか。その分節化に、宗教(教会)、政治(国家や公共圏(メディア・文化)など)、経済(同業組合的規制、市場経済など)、科学(アカデミーなど)などがいかに関わっているか。

そうした独自の文脈において分節化された〈地下〉が、〈地上〉とは異なるいかなる知のネットワーク構造を作り上げ、それがどのように機能したか。〈地上〉と〈地下〉の二重構造はどこでどう切り結び、またどこでどう連携したか。フランスの公共圏で18世紀後半に生み出された「哲学書」(ダントン)のような文書をどう捉えるか。それは地上文書か地下文書か。〈地上〉と〈地下〉の闘争や連携は各地域でいかになされたか。

18世紀の〈地下〉の知はいかなる特性を有したか。18世紀フランスについては、現代のインターネットを思わせるような、その知の匿名性やコピー的編集性が話題になるが、そうした特性は他の

地域でも見出されるか。それは著作権や独創性を重視する、知の近代の見方との関係でいかなる意味を持つか。その方向から、本来〈地上〉の知の集大成と言えるような『百科全書』や大事典の知や雑誌や新聞の知をいかに捉えるか。それらがコピペ的編集によって作られたことは現在よく知られるところだが、そうした大事典の知がなぜ〈地下〉の知と相同的なのか。

以上は寺田の企図であり、実際の共通論題がそれを内破して展開することを期待する。

## 第1報告

### ジョン・トーランドのスピノザ反駁

三井 吉俊  
(千葉大学)

アイルランド出身の「遍歴」する思想家ジョン・トーランド John Toland (1670 - 1722) が、1704年にロンドンで出版した『セリーナへの手紙』 *Letters to Serena* には、スピノザ主義を变形した新種の唯物論的汎神論が唱えられていると言われてきた。トーランドという思想家は、イングランドの政治・宗教体制について具体的発言をしながら、その一方でヨーロッパの文芸共和国の動向や、さらには地下文書世界とも深いつながりを持っている。

『セリーナへの手紙』の刊行そのものも、1701年秋、イングランドにおける王位継承法成立の知らせをハノーヴァー選帝侯妃ソフィアに届ける使節に同行し、ソフィアの息女プロイセン王妃ゾフィー・シャルロッテとベルリンで面識を得たことに端緒を持つ。1702年夏から秋にかけてもトーランドはゾフィー・シャルロッテの宮廷を訪れ、ライプニッツらの当地知識人と交わっている。『セリーナへの手紙』の第一～第三書簡は、ゾフィー・シャルロッテ宛と考えられ、ここでは「偏見」を題材として社会的・宗教的体制についての批判が展開される。今回扱おうとするテーマは、第四～第五書簡で自然学・形而上学の問題として扱われる「スピノザ反駁」である。第四書簡は「オランダにいるある紳士」に宛てられ、第五書簡は第四書簡の主張に反論を呈した「ある高貴な友人」宛であり、その末尾では宮廷にいる「共通の友人」(おそらくライプニッツ)にも言及がなされている。

トーランドのスピノザ批判は一点に集中している。スピノザがチルンハウスとの往復書簡で、延長という属性だけでは事物の多様性を証明できないとしながら、それを可能にする何らの属性も示さなかったことを批判する。トーランドによれば、その属性こそ物質に本質的な「活動力」であり、物質のどんな部分も運動をしている。ロックが掲げた物質の特性である延長性、固性(固体性)と並べて、この活動性に気づくことこそ自然学の発展を推し進めるものだという。そのように一旦物質に活動力を認めれば、統括する知性は必要なくなるのではないか、神は不必要ではないか、と反論され、トーランドは以下のように答える。活動力という特性を持つ無限の物質を、神が無から創造した、無限な物質は純粋な霊体の存在を排除することはない、と。これらの議論の裏にある宗教的・宗派的背景を探ってみたい。



## 第2報告

### 18 世紀イギリス・エロティカの系譜

小林 章夫  
(上智大学)

18 世紀イギリスのいわゆる「カノン」(正典)とされる文学作品の背後には、当然ながら無名の作品が数多存在することは知られていたものの、それらの内実はあまり知られていなかった。その理由としてはいろいろな要因が考えられるけれども、何と云っても重要なポイントはそうした作品を実際に手にとって読むことがほとんど不可能だったことによる。

しかしながら最近になって、*Eighteenth-Century British Erotica* (Pickering & Chatto) が第 1 シリーズ、第 2 シリーズとして出版され、18 世紀の無名のエロティカが 100 点ほど、全 10 巻にまとめられた結果、主な作品を読むことが可能になった。また *Eighteenth Century Collections Online* というデータベースには、今日では読むことが難しい作品が多数収められており、これもまたこの時代の出版世界の全貌を知る上で不可欠な資料となっている。

もちろんこうした背景には、David Foxon, *Libertine Literature in England, 1660-1745* (1965) を嚆矢とするエロティカ研究の流れが大きな成果を上げてきたことは忘れてはならない。そこで今回の発表では、主にこうしたエロティカの流れを跡づけることで、イギリスにおける「地下世界文学」の系譜を見つめることにしたい。そこであらかじめこの発表のキーワードを軸として概略を述べておくと、「翻訳・三文文士・出版人」となるが、これを若干敷衍するならば、以下のような流れになる。

- (1) 17 世紀の翻訳エロティカ
- (2) 18 世紀のエロティカを支えた著者たち
- (3) さまざまな出版人

なお、この過程で 18 世紀イギリス・エロティカを取り巻く出版状況、検閲問題にも適宜触れる予定である。

## 第3報告

### 「半地下」のウィーン 18世紀後半のハプスブルク君主国における書物の流通

上村 敏郎  
(獨協大学)

本報告では、ドイツ語圏、特にハプスブルク君主国ウィーンに注目し、地上と地下が交錯する場における書物の流通について明らかにしていく。

複数の領邦国家がひしめき合うドイツ語圏では、統一国家の不在が書物の流通に大きな影響を及ぼしていた。書物の円滑な流通にとってデメリットとなっていたのは、関税である。書籍商たちの目の前には、複数の国境が経済障壁として立ちはだかっていた。しかし、こうした複数性は、書籍商にとって全く別の商機を与えていた。神聖ローマ帝国全体に対する検閲令も存在していたものの、検閲実践は個々の領邦単位におこなわれていたために、ドイツ語圏では書物の透過性が極めて高い状態にあった。また、関税や検閲をくぐり抜けるための出版戦略が洗練され、委託販売制度が発達し、書籍市場のネットワーク化が進んだ。

こうしたドイツ語圏の特徴はウィーンを中心とするハプスブルク君主国の書籍市場のあり方も規定していた。ドイツ語圏の中でもカトリック文化圏であったオーストリアは、その保守的なイメージが先行し、近年に至るまで書物の歴史を扱う上で等閑視されてきた地域である。しかし、実際には中央ヨーロッパの書物流通において重要な役割を果たしてきた地域であった。特に1781年のヨーゼフ2世の検閲緩和以後、地上と地下との境界は曖昧となり、ウィーンでは「半地下」ともいえる公共空間が出現し、匿名パンフレットの洪水が生じた。この時代を代表するウィーンの書籍商ゲオルク・フィリップ・ヴァーヘラーは、この機を活かし、様々なネットワークを駆使してハプスブルク君主国における地下文書の流通に一役買っていた。フランス革命前夜の1789年に彼が警察に逮捕されたとき、彼の所有していた書籍商品にはドイツ語版『三詐欺師論』をはじめとする複数の「地下文書」が含まれていた。

フランス革命勃発後、ウィーンにおいて当局による「ジャコバン狩り」がおこなわれた。1793年にビアハウスでの瀆神発言が原因で逮捕された靴屋の事例は、ドルバックの『自然の体系』などの典型的な地下文書がウィーンにおいて特定のコミュニティの間で流通し、一定の影響を与えていた痕跡を示している。

本報告で取り上げる事例からは、フランスと同様、ウィーンにおいても様々な回路（秘密結社、居酒屋、知識人の共和国など）が連携しながら、知のネットワーク構造が築かれていたことがわかる。

## 第4報告

### 日本における「古典」の成立とその展開 —『太平記』を事例として—

若尾 政希（一橋大学）

「太平記は史学に益なし」（『史学会雑誌』17、1891）とは、久米邦武の言である。日本近代の歴史学は、その出発点で、14世紀の動乱期を描いた軍記物語『太平記』との決別を宣言したのであるが、結局、『太平記』から離れられず、躓き挫折した。久米邦武（1839～1931）がまず躓いた。久米は、有名な『米欧回覧実記』の著者であり、のちに帝国大学（東京帝国大学）の国史学教授、兼臨時編年史編纂委員を務め、「古文書学」の命名者で、アカデミズム歴史学の草分け的存在である。この久米が「太平記は史学に益なし」論文を書いた年に「神道ハ祭天ノ古俗」という論文を発表した。これに怒った神道家たちが久米宅を訪れ抗議、さらに内務省と文部省に抗議。久米は帝大教授の職を追われたのである（久米事件）。2度目の挫折が南北朝正閏論争である。1911年の帝国議会で、国定教科書『小学日本の歴史』が、南朝と北朝を併記していることが問題となった。結局、明治天皇の裁断により、南朝を正統とし、北朝の歴代の祭祀は従来どおりと決定された。教科書編纂委員の喜田貞吉（1871～1939）は休職処分となり、教科書の記述も「南北朝時代」から、「吉野朝時代」に改められた。第三の挫折は、皇国史観である。これは、天皇が永遠に君臨する神国の歴史として日本の歴史を描く歴史観である。代表的論者は、東京帝国大学文学部の国史学・日本思想史学兼任教授の平泉澄（1895～1948）である。この平泉が皇国史観の聖典として評価したのが『太平記』であり、理想的臣民として称揚したのが「楠公」正成だった。「楠公こそは、忠義のいたましき実践者、臣道の尊き師範であつて、日本の道は公によつて益々明かとなり、皇国の尊厳は公によつて愈々加はつたのである。曾て明治維新の偉大なる先覚が、多く公によつて奮起せられた如く、今日大東亜戦争の勇士が、陸に海にはた空に、壮烈鬼神を泣かしむる奮戦も」、「六百年前の師範楠公の指南による所」が非常に多い。今や、「我等臣民の皇道翼賛の任務」を果たすべく、「楠公の精神を明かにし」、これを「国民の間にひろめて、国民全部」の「魂を清める事」が「最も必要な事といはねばならぬ」（平泉澄「序」大野輝之編『大楠公遺訓とその精神』尚楠社、1942）と平泉は述べる。国民を戦争に総動員するイデオロギーの役割を果たしたのである。

近代歴史学は、いわば『太平記』のくびきを逃れられず、結局のところ、『太平記』により挫折させられた。そのため、戦後、研究者は『太平記』を避けてきた。教育の現場でも、教科書に墨を塗り正成を抹消してきた。しかしながら、冷静に考えてみると、『太平記』は14世紀の歴史的産物であり、それに対し皇国史観は20世紀の歴史観である。『太平記』は本当に皇国史観の聖典としてしか読めないのか。『太平記』という軍記物語が、成立してから現代まで、時代のなかでどのように読まれてきたのか。『太平記』の読み方を検討してみる必要がある。本報告では、『太平記』が時代のなかでどのように読まれたのか、いかなる歴史的意義を担ってきたのか、検討してみたい。結論的にいえば、『太平記』が日本の古典となったのは17世紀であるが、18世紀に『太平記』の新しい読み方が生まれ、それが19世紀から20世紀にかけて大きな力を持つようになる。そのプロセスを叙述したいと思う。

#### 参考文献

若尾政希『「太平記読み」の時代』平凡社ライブラリー、2012、原版は平凡社選書、1999

若尾政希『「太平記」は尊皇の書か？—『太平記』をして史学に益あらしめん—』『歴史評論』740、2011

若尾政希『近世の政治思想論—『太平記評判秘伝理尽鈔』と安藤昌益』校倉書房、2012

2013年4月 発行

日本18世紀学会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部 増田（仏文）研究室

Tel. / Fax. 075-753-2766

[jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp)